

帰化植物アライトツメクサの新たな分布

橋渡勝也

Katsuya Hashido: *Sagina procumbens*, a newly naturalized plant in Nagano

ナデシコ科の帰化植物アライトツメクサが、長野県では初めて南安曇郡豊科町で平成6年(1994)に採集されたことを発表した(長野植研第28号)が、その後、県内の各地で生育が確認されたので、その新たな分布について報告する。

1. どんな植物か

アライトツメクサは、外形が在来ツメクサに大変よく似ている。ツメクサもアライトツメクサもどちらも大変に小さな植物体であり、庭や石畳みの隙間を好んで生えるが、アライトツメクサの方が全体的により小さい。さらに、次の点で違いがある。ツメクサの花びらがく片は5数であるが、アライト

ツメクサは4数である。ツメクサのく片や花の柄には微小な毛(腺毛)が生えるが、アライトツメクサは無毛である。ツメクサには必ず5枚の白色の花

びらがあるが、アライトツメクサの4枚の花びらは小さく、ようやく確認できるか、時にはそれさえも欠くことがある。

図鑑によっては多年草であると記されているが、豊科町での観察によると、夏を過ぎる頃からその年の個体が姿を消し、種子が芽生えた状態で越冬することから越年草であると思われる。ただし、植木鉢の中では、そのままの個体が越冬していることから、条件によっては多年草として生育することも考えられる。

2. 「アライト」か「アライド」か(和名の由来)

平凡社発行の『日本の野生植物』では、こ

の植物を「アライドツメクサ」と呼んでいる。しかし、その他の図鑑類一長田、富士(1977)、杉本(1978)、大井(1983)、高橋(1990)では「アライトツメクサ」と、「ド」ではなく「ト」を使っている。

「アライト」「アライド」とは、千島列島の北端に位置する島の名前に由来している。『日本地名大辞典』(日本書房)によると、漢字では「阿頼度島」をあて「アライト」と読むことが記されているが、「中学校社会科地図」(帝国書院)では「アライド島」となっており、この島の呼び方そのものに両説がある。そもそもロシア語を日本読みしたものだろう

うから原語を調べてみると、ロシア語ではА л а и д (Alaid)と綴り、最後の“д”(d)は濁らないことを中井秀樹氏からご教示いただいた。このことから、この植物は「アライトツメクサ」と呼ぶことがよいのではないかとと思われる。中井氏によれば、アライト島と呼ばれていたこの島は、現在ではアトラリウア島と呼ばれ、この島にある活火山にアライトの名を残しているとのことである。

3. 和名「アライトツメクサ」命名について

さて、このアライトツメクサは、水島正美が昭和29年(1954)に「アライトツメクサ本州に現る」という論文により注目されるようになった。これによると、1953年に同氏にもたらされた青森市で採集された植物は *Sagina procumbens* L. であり、和名はアライトツメクサ(館脇192了)=トヨハラツメクサ(菅原1937?)であると記されている。和名の原典と

みられる館脇操氏の論文は、昭和2年(192了)に「札幌博物学会会報」に掲載された「伊

表1. アライトツメクサの新たな採集地 (産量は、ツメクサと比べて「多い・普通・少ない」で表示)

採集地	生育地	海拔高度	採集年月日	産量
1 須坂市小山	須坂市文化会館石畳の間	400m	1995.6.4	普通
2 南安曇郡豊科町	豊科南中学校庭	560m	1995.6.11	少ない
3 南安曇郡三郷村明盛	三郷村役場玄関石畳の間	600m	1995.6.11	少ない
4 大町市神栄町	大町営林署マンホールの蓋周辺	710m	1995.6.17	多い
5 南安曇郡堀金村上堀	理髪店前タイル隙間	580m	1995.6.17	少ない
6 大町市九日町	商店街歩道の端	740m	1995.6.17	多い
7 南安曇郡穂高町穂高	穂高町民体育館前歩道の端	340m	1995.6.17	少ない
8 北安曇郡松川村	松川村役場敷石ブロック隙間	615m	1995.6.17	普通
9 南安曇郡梓川村倭	アカデミア館横公園砂地	620m	1995.6.18	少ない
10 松本市島内	松本市音楽文化ホール石畳の隙間	580m	1995.6.24	普通
11 南安曇郡穂高町北穂高	JR有明駅前路傍	540m	1996.5.3	普通

藤秀五郎・小森五作両氏採集アライト島植物に就きて」というものであることが、伊藤浩司、中井秀樹両氏の紹介で分かった。この蓋文に“Nom. Jap. *Araito-tsumekusa*”と記されていることから、和名「アライトツメクサ」はここで命名されたものである。

4. 長野県内での新たな発見と分布

さて、豊科町で発見されたアライトツメクサは、ここだけの特殊な分布をしているのかどうかを確かめるために、昨年の春から、出掛けた先々で注意して見付ける努力を重ねてきた。その結果、長野県内では、次のような場所でアライトツメクサを発見することができた (表1参照)。

これらの生育地の共通点をみると、いずれも人間が人工的に造った庭や歩道であることが多く、人の出入りが激しく踏まれることの多い環境である。

アライトツメクサがこのように分布することになった背景については、靴の裏や車のタイヤに付着して運ばれたことが考えられ、同時にアライトツメクサの好む人工的な環境が増えていることもその一因であると想定される。ツメクサとアライトツメクサの種子を同

じ条件の元で8月に播種した実験では、アライトツメクサの方が数日早く発芽することも確認しており、アライトツメクサが分布拡大により有利な適応能力と戦略を有していると考えられる。

また、分布経路については、アライトツメクサが現在世界各地に分布を拡大している今日、アライト島から次第に南下して長野県に入ってきたとは考え

にくく、むしろ世界各地からいろいろな経路を経て侵入してきたとする考え方が妥当であろう。

おわりに

アライトツメクサ *Sagina procumbens* L. の分布については、今日では、ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、オーストラリア、中国など世界各地から報告されていることを、大村敏朗氏が長年に亘って集められた貴重な文献により知ることができた。

昭和29年当時は、東アジアでは千島列島アライト島の海岸沿いの土崩地、樺太豊原付近の路傍や青森市のみであったものが、現在、国内でも長野県を初め、北海道、横浜、静岡で発見されている。このことから、さらに注



写真1. アライツツメクサの花をつけた様子一花は上または斜め上を向いて咲き、咲き終わると花柄上端を曲げて地面に伏せる。(H7.6.10豊科町にて)



写真2. アライツツメクサの種子をつける頃の様子一熟した果実は上を向き、萼片は四方に開く。(H7.6.10豊科町にて)



写真3. 日陰の湿った土に咲くアライツツメクサー一日当たりの良い場所のもの(写真1)よりも節と節の間が伸びる。(H7.6.17大町市にて)

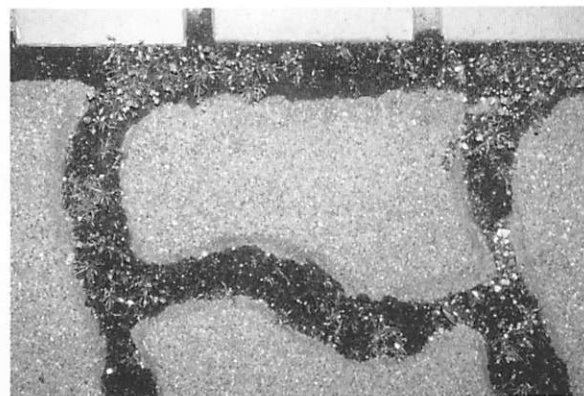


写真4. 石畳みの隙間に咲くアライツツメクサーツメクサよりも小さな植物体であるため踏圧を避けて花を咲かせることができる。(H7.6.17松川村にて)

目して調べていけばその分布はかなり広がるものと予想される。

今回のアライツツメクサの分布拡大の新知見は、今後足元の微小な植物にも注意を払って見ていくことの大切さを改めて示唆されたものとなった。筆者は、1996年4月15日に名古屋市千種区のバス停で、ツメクサでもアライツツメクサでもないツメクサ属植物が石畳の隙間にびっしりと生えているのを観察している。これが森ら(1993)が指接している「第三のツメクサ」に当たるかどうか、確認を急ぎたいと思っている。

本稿をまとめるに当たり、静岡市の大村敏朗氏からは、和名に関して種々ご教示いただき、多数の文献を紹介していただきました。北海道の伊藤浩司氏、中井秀樹氏からは、ロシア語の読み方や文献についてご教示いただきました。記して御礼申し上げます。

引用文献

- 水島正美 (1954) アライツツメクサ本州に現る。植物研究雑誌, 第29巻: 57-58頁。
館脇操 (1927) 伊藤秀五郎・小森五作両氏採集アライツ鳥植物に就きて。札幌博物学会会

報, 第9巻: 13頁.

Shigezo Sugaoara (1939) *Illustrated Flora of Saghalien*, pp.828-824.

北川政夫 (1982) 日本の野生植物 草本II, 41頁, Pl.39. 平凡社.

長田武正・富士堯 (1977) 日本産帰化植物仮目録, 帰化植物, 141頁, 保育社.

杉本順一 (1978) 改訂増補日本草本植物総検索誌1. 双子葉編, 121頁. 井上書店.

大井次三郎 (1983) 新日本植物誌頭花編, 648頁. 至文堂.

高橋秀男 (監修) (1990) 野草大図鑑, 36頁. 北隆館.

森茂弥・城川四郎・勝山輝男・高椿秀男 (1993). スミレもタンポポもなぜこんなにたくましいのか, 45頁. PAP研究所.

〔植物ニュース〕

ハイイロヨモギ *Artemisia sieversiana* Willd.

1995年8月4日に、木曽郡木祖村小木曽の林道路傍にて、ヨモギ群落の中に、葉が白つばく頭花の大きい見なれないヨモギ属植物を見付けた。神奈川県生命の星・地球博物館所蔵の標本と照合した結果、アジア大陸原産の帰化植物ハイイロヨモギであることがわかった。長田武正著『原色日本植物図鑑』によれば、1952年に小諸町千曲川畔で日本で初めて採集されたとあり、近年では1995年8月8日に、横浜山下永谷でも採集されている(神奈川県植物誌調査会ニュース第41号)。同定の労をとっていただいた高橋秀男先生に御礼申し上げます。(橋渡勝也)

〔植物ニュース〕

ケショウヤナギ *Chosenia bracteosa* Nakai

1996年4月26日に、堀金村在住の竹岡正男氏から、下垂する雄花のついた柳の枝が届けられた。翌日、松田行雄・清水建美両先生にその枝を、5月2日に豊科町在住の飯沼冬彦先生に現地を、それぞれ見ていただきケショウヤナギであることが確かめられた。生育地は穂高町牧地籍の標高610m付近、烏川河岸である。ここはかつて河床か溪畔であったが、現在は流れから離れアカマツが復元している林の縁に辺り、比較的乾燥した立地である。胸高直径25cm樹高約10mの雄木で、幹には傷められた跡があり、樹冠も大きくない。烏川水系では、かつて一ノ沢に生育の記録があるが、1959年に洪水のため流されて以来見付かっていなかった。(橋渡勝也)